

大きなキノコーオニフスベ

バレーボールのような大きなキノコ

夏の終わりから秋に、庭のすみで、まっ白のまるい大きなキノコが出たと問い合わせがありました。初めて見る人は、突然あらわれた大きなキノコにおどろかされ、少し気味悪く感じられるようです。このキノコはオニフスベといい、わずか数週間で大きいものでは直径60cmくらいになります。

「ふすべ」は「こぶ」の昔の言い方で、オニフスベはオニのこぶという意味です。

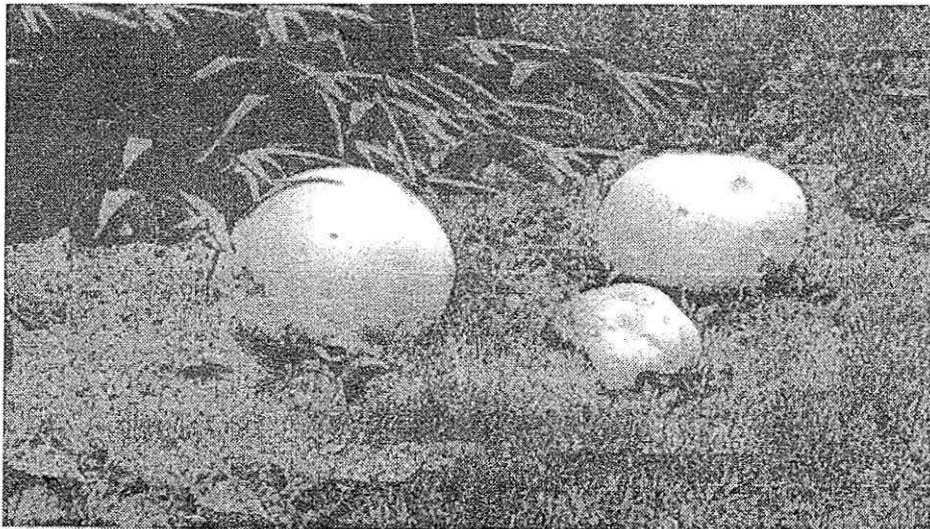
オニフスベはどこにいるのか

オニフスベが見つかる場所は、庭や畑のすみ、竹やぶ、雑木林の入り口など、やや明るく開けた所のようにです。出るのは、夏から秋と決まっています。

それ以外の季節、オニフスベはどこにいるのでしょうか。

オニフスベは一年の大部分を、地面の下で生活しています。地上に出ているときは、その地面の下にいます。この時のオニフスベの姿は、白い大きな球形の時には想像もできない白い糸せんしのような菌糸です。目につきにくい菌糸の状態は、キノコと同じ菌類のカビとよく似ています。

オニフスベは、この菌糸の時に、落ち葉やかれ木などをから栄養をとっています。



庭のすみに出たオニフスベ

地上にでて子孫をふやす

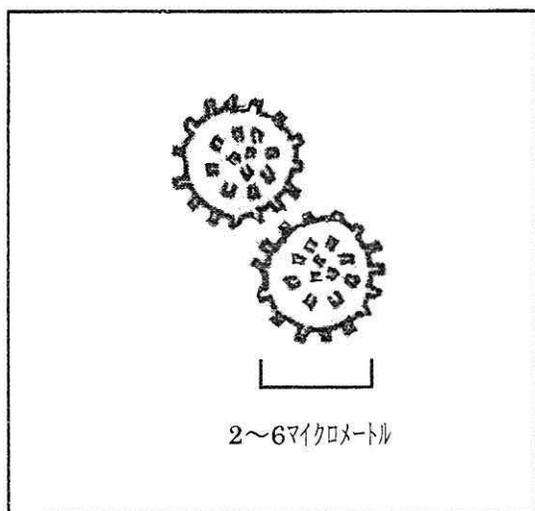
オニフスベがひょっこりと地上に出て、大きな球形をつくるのは、植物の種子にあたる胞子^{ほうし}をつくり、子孫を増やすためです。

地上に出た白く大きなオニフスベの体は、密により集まった菌糸^{きんし}でできていて、内部に胞子^{ほうし}がつくられます。

まだオニフスベが成長の途中で幼い時は、表面も内部も白色で、さわるとゴムまりのように弾力があります。十分に成長すると、だんだんと表面の皮がむけてきて、はじめは白色だった内部は茶色になっています。表面の皮がすべてむけて残った茶色のかたまりは、風が吹くと、粉のようなものを飛び散らせます。

この茶色のかたまりは、胞子と弾糸^{だんし}のかたまりです。オニフスベの胞子は球形で、大きさは2～6マイクロメートル（1マイクロメートルは1000分の1ミリメートル）とキノコの中でも小さい方に入ります。弾糸は菌糸で、胞子の飛び出し方に関わっているようですが、まだよく分かっていません。

そして、茶色のかたまりは跡形もなく飛び散り、オニフスベは来年まで地上から姿を消します。



オニフスベの胞子

風によって飛ばされた大量の胞子は、落ちた所で菌糸をのばします。運良く、オニフスベにとってすみ心地の良い所に落ちたものだけが、生長をつづけます。栄養分をたくわえると、地上にあらわれて、また私たちをその大きさでおどろかせます。

(坂井奈緒子)



富山市科学文化センター

〒939 富山市西中野町1-8-31 TEL(0764-91-2123)

平成9年11月1日